

内容紹介

2011年3月11日、福島第一原発のある大熊町に巨大地震が襲いかかった。大津波がくる前、町に出た作業員は「配管がムチャクチャだ」と叫んだ。頭上を飛ぶ数百羽の黒いカラスに、「この世の終わり」と感じた住民もいた。その後、爆発が続き、放射線が拡散。逃げ出した作業員は避難所から連れ戻された。病院で、避難先で、老人が何人も亡くなった。「東電さん」の恩恵を40年受け、「ふくいち感謝デー」にも毎年参加した町民の一変した人生の数々を、当事者の証言とともに明らかにする。

初出

朝日新聞 二〇一三年七月十九日～八月七日

目 次

- [第1章 先生、逃げろ！](#)
- [第2章 「まるで作業員狩り」](#)
- [第3章 吐く息まで疲れてる](#)
- [第4章 死ぬかもしれねえな](#)
- [第5章 新しい一生の仕事](#)
- [第6章 父は広島にいた](#)
- [第7章 「東電さん」の恩恵](#)
- [第8章 9.9歳、移送の末に](#)
- [第9章 想定内のはずだ](#)
- [第10章 入学支度金5万円](#)
- [第11章 原葬なしで困るのは](#)
- [第12章 奪われた自然観察会](#)
- [第13章 もう戻れない](#)
- [第14章 汚れちまった悲しみ](#)
- [第15章 鋭い歌風の好々爺](#)
- [第16章 怒るより現実的要求](#)
- [第17章 「賛成」は面会の場で](#)
- [第18章 「なぜ賛成」抗議殺到](#)
- [第19章 よーく考えてみろ](#)
- [第20章 「反対。町民だから」](#)

第1章 先生、逃げろ！

2011年3月11日、福島第一原発の1～4号機がある福島県大熊町の昼下がり。塾教師の木幡（こわた）ますみ（57）は町内の喫茶店で椎名篤子（しいなあつこ）（58）ら友だち4人とコーヒーを飲んでいた。

のちに考えると、あと数分で大震災が起きるところだった。ますみは何か胸騒ぎを感じ、こんなことを口にした。

「原発に何かあったら、もうこの町には住めないよね」

「そうだね」と返事が返って少ししたとき、揺れが始まった。午後2時46分だった。

喫茶店の窓ガラスはうねるように波打ち、ガシャガシャと割れた。天井が崩れ、客の周りに落ちた。

揺れがおさまった後、ますみは急いで自宅に戻った。タンスが倒れていた程度で、家屋にそれほど大きな被害はなかった。

役場に向かった。夫の仁（じん）（62）が町議会議員を務めていて、ちょうど議会の委員会に出ていた。

「お父さん、町内が大丈夫か見に行こう」。2人で町に出た。

午後3時半ごろだった。

役場近くのコンビニに行くと、異様な光景に出くわした。

第一原発の方向からざわざわと、作業員の制服を着た人たちが早足で歩いてくる。制服の色は企業ごとにまちまちだったが、頭髮のせいか全体的に黒っぽくみえた。

「アリの大群のようだ」。ますみはそう思った。

その大群が、続々とコンビニに入っていく。停電してレジが使えず、店員が電卓で計算していた。それを尻目に、商品をてんでに持ち去っていく。

「あれえお父さん、みんな勝手に持っていつちゃうよ！」

ますみは仁に叫んだ。

作業員の中に、ますみの塾の教え子が何人かいた。

「どうしたの、何があったの？」

一人が叫んだ。

「先生、逃げろ！ ここはもう駄目だ。配管がムチャクチャだ」

まだ津波が来る前だ。それでも彼らは原発から逃げはじめていた。

当時、第一原発で働く大熊町民は、人口の1割、約1100人いた。

第2章 「まるで作業員狩り」

2011年3月11日、大熊町。大震災の直後だった。

空を真っ黒に埋める数百羽のカラスが、低い空を鳴きながら福島第一原発の方へ飛んでいった。

目撃した1人、土木建築業を営む小林昌弘（こばやしまさひろ）（48）はいう。

「見たことねえ数だったなあ。うちの上を飛んでった。ヒチコックの映画にそんなのがあったけど、この世の終わりたいな感じだった」

原発ができて40年、大きな事故は起きなかった。町民の多くは、地震でも原発は大丈夫だと思っていた。生活も原発で成り立っていた。

コンビニ前で、避難する作業員の大群に遭遇した塾教師の木幡ますみもいやな予感がした。

「原発の中で働いている人があんなに慌ててるんだから、大変なことになるかもしれない」

その後、原発は相次いで爆発を起こす。

3月14日、ますみは家族と共に、30キロ離れた田村市の総合体育館に避難した。2千人くらいがひしめいていた。ほとんどが大熊町民だった。原発作業員も多かった。

体育館での避難生活にいらだつ人が多かった。赤ちゃんの泣き声に、誰かが「黙らせろ！」と怒鳴る。

近くにいた年配の女性が、戦争中とおんなじだ、とつぶやいた。

「あん時も防空壕（ぼうくうごう）で怒鳴る人がいた。泣く赤子の口を塞いだんだあ」

体育館に避難して間もなく、作業服を着た中年男の3人連れがやってきた。作業服の色は濃いベージュ。そのうちの1人が、体育館の1階にいたますみに尋ねた。

「○○という男はいますか」

知らない名前だった。「体育館の入り口に掲示板があります。そこに貼ったらどうですか」と答えた。

男たちはますみを無視し、体育館の2階にずんずん上っていった。不審に思ったますみは、後をついていった。

2階では原発から逃げてきた若い作業員たちが隠れるようにして毛布をかぶっていた。その毛布を男たちが一人ひとりめくっていく。

ますみは思わず「荒いことすんなよう！」と声をあげた。しかし彼らはやめない。

逃げ出した作業員を見つけると、男たちは現場に戻るよう説得した。男たちが去った後、作業員の妻が「行っちゃだめだ」と夫に泣きながら訴えていた。

「まるで作業員狩りだな」。周りからそんな声もれた。

第3章 吐く息まで疲れてる

逃げた作業員を連れ戻す男たち。顔ぶれは違うが、彼らは2週間ほど毎日のように田村市の総合体育館にやってきた。

木幡ますみは「第一原発は人手が足りなくなっているんだ」と感じた。上司が来るとトイレに駆け込んで隠れる者もいた。しかし避難していた作業員たちは次々と見つかり、戻っていった。

他の避難所でも、作業員が連れ戻された。田村市の旧春山小学校にいた小林昌弘は、避難所で知り合った作業員にいわれた。

「携帯に出ないで隠れてたんだけど、上司が避難所に来て見つかった。仕方ないからまた原発に行きますわ」

小林が「一緒に避難している子どもさんたちはどうすんの」と聞くと「仕方ない」と答えた。

作業員たちは避難所から原発に通った。仕事から帰ってくると、みんなボロ雑巾のように横になった。ますみらは「吐く息まで疲れてるね」とささやいた。

ますみの塾の教え子には作業員をしている者も多い。

その一人、北原秀規（きたはらひでのり）（36）は遠く福岡に避難した。津波のあと、親戚を頼って妻子4人と逃れた。

北原は原発の補修を担当する企業で働いていた。地震があった日は第一原発の4号機にいて、地下で5人の同僚と定期点検をしていた。

地震が来た。直後、警報のサイレンが鳴り、停電で真っ暗になった。懐中電灯の明かりを頼りに地上へ向かった。いつもは嚴重にロックされている入り口の二重扉が、開けっ放しになっていた。

地上に出て、海をみた。変わった様子はない。「津波は来ない」と思った。非常用発電機の煙突を見上げた。ディーゼルエンジンの排気が煙になって立ち上っている。

「電源が確保できているなと思いました。これなら原発は大丈夫だと安心したのを覚えています」

構内にある会社事務所に行くと、すでに同じ会社の100人ほどが集まっていた。上司からは、とりあえず帰るよういわれた。家の片付けを済まし、戻って来られる人は戻ってくればいい——。約5キロの自宅に車で帰った。

いつもなら5分ほどだが、避難する人たちの車で大渋滞だった。車は一向に進まないし、携帯もつながらない。北原の不安は募った。家には両親と妻、生後2カ月の次女を含む3人の子どもがいた。

第4章 死ぬかもしれねえな

地震があったとき、第一原発4号機で働いていた北原秀規は、いつもの8倍、40分かけて大熊町内の自宅に帰り着いた。

妻の美竹（みさお）（36）は、落ちて割れた食器などの片付けをしていた。長男の玄季（げんき）（12）、長女の結（ゆい）（8）、生後2カ月だった次女栞（しおり）ら家族は全員無事だった。ほっとした。

翌朝、原発が津波をかぶり、非常用電源が使えなくなったことを知った。「やばいな」と思った。町から避難指示が出て三春町に避難した。午後、避難所のテレビに1号機の建屋の爆発が映った。

「ああ、これはだめだ」

妻の遠縁が福岡県筑後市にいる。3日後、妻子をそこに出発させた。

北原も美竹も大熊町で育った。他の土地での生活には慣れていない。それでも子どものことを考えると、放射能が怖かった。

北原は地区の消防団員で、避難先を回って避難民の世話をする仕事があった。数日後、それが一段落すると自分も後を追った。

しかし、福岡に着いて1週間もしないうちから北原は悩み始める。会社の要請で、同僚たちが次々に原発へ戻っていると知ったからだ。

同僚は「北原さんは赤ちゃんがいるし、来なくてもいいですよ」といった。会社には携帯番号を伝えてあったが、連絡はきていない。

だからといって、行かなくていいのか。行くべきではないか。

「自分だけ逃げるわけにはいかない」。そんな思いが募った。

北原は、原発作業員のラグビーチームの一員だ。高校時代は相撲部だったが、そんな初心者の北原にチームメートは親切だった。彼らも作業に戻っているはずだ――。

北原は会社に電話した。

「これから戻ります」

俺、死ぬかもしれねえな。そう思った。それでもいいや、妻と子どもさえ元気でいてくれれば、と。

結の小学校の入学式を見届けてから、原発に戻ることにした。結は入学式で水色のランドセルを背負い、うれしそうだった。

思い残すことはない。

翌日、朝一番の新幹線で発った。子どもたちが見送ってくれた。

途中、東京で昆布茶を3缶買った。ヨウ素剤の代わりになると聞いたことがある。どれくらいの期間になるかは分からないが、放射線量がいつばいになるまで働こう。

「俺が線量を食ってる間は、他のだれかが食わずに済む」

第5章 新しい一生の仕事

北原秀規が避難先の福岡から大熊町に戻ったのは、震災の約1カ月後だった。

原発に行くと、防護服姿の作業員が建屋の外を歩いていた。以前は放射線管理区域でしか見られなかった姿だ。異様に感じた。

しかし、自分自身がその一員になるとすぐに慣れた。ヨウ素剤の代わりにと思って買った昆布茶も、結局は飲まなかった。

1日3時間、作業した。汚染水の放射能除去装置を据え付けた。爆発した4号機では、がれきを手で拾って片付けた。

以前は入る場所によって細かな書類が必要だったが、関係なくなっていた。自分の裁量が増えたようで、かえってやる気が出た。

そんな北原を、妻の美竹は心配しながら見守った。

「心配でした。でも原発の作業を中途半端にしてしまったら、本人はこれからの人生でそれをずっと引きずるだろうなと思っていました。区切りをつけ、自分が納得しないと前に進めないだろう、と」

美竹には北原の気持ちが分かる理由があった。

美竹は大熊の隣、双葉町の病院で看護師をしていた。

地震の時は次女の出産で産休を取っていた。同僚たちが患者の世話で悪戦苦闘していることが伝わってきたが、今は何もできない。そのことを心苦しく感じていた。

子どもたちは父親に会いたがった。長女の結は「お父さんに電話して」と美竹にせがんだ。長男の玄季は寂しいそぶりを見せなかったが、父親から電話がきたときは妹の結と電話を取り合った。

4号機のがれきの片付けが一段落すると、北原の仕事が終わった。7月、北原は3カ月ぶりに福岡に戻った。

北原は、原発作業員のラグビーチームから記念のボールを贈られた。「前へ！」という大きな文字の周りにチームメートが寄せ書きをしてくれていた。

こんな言葉があった。

「ご家族、自分自身を大切にご活躍ください」

北原は、やっと新たな一步を踏み出す気になった。

近所で、イチゴ「あまおう」をつくる農家が働き手を募集していた。そこで働き始めた。

11月に最初の収穫があった。

今はこれを一生の仕事にしようと思っている。

第6章 父は広島にいた

北原秀規を塾で教えた木幡ますみは、郡山市の出身だ。

35年前に大熊町へ嫁ぐとき、ますみは友人に言い残した。「大熊の原発で事故が起きたら、郡山だって危ないんだよ」

ますみは原発に反対だった。それには父親の影響がある。

小中学校の教師をしていた父親はよく「原発はいらない」といつていた。繰り返し聞かされるうち「原発は危ないもんなんだ」という意識が定着した。ただ、父がなぜそういうか、尋ねたことはなかった。

2012年4月、父が亡くなった。死の床でますみに、自分が広島で被爆していることを明かした。

「原爆が落ちた2日後、軍の命令で広島に入った。後片付けのためだった」と。

それまで黙っていたのは、よほどつらいことがあったのだろう。

小さなころからますみは体が弱かった。父は、自分が被爆したせいでそうなったと思っていたのかもしれない。毎年8月になると父の酒量が増えたのはそのせいかもしれない、とますみは思う。

夫の仁を、父は「よく酒が飲める」と気に入った。仁も原発に反対だった。東北大学時代には、宮城県の女川原発の反対運動をしていた。

しかし大熊町で、他に原発に反対している人は見あたらなかった。町の人はますみに「旦那さんは過激派だけど、あなたは毒されちゃだめよ」と忠告した。

仁の母親は町の婦人会長をしていて、原発受け入れ派だった。

使用済み核燃料からプルトニウムを取り出して再び燃料にするプルサーマル計画。その説明会が開かれたことがある。東京電力幹部が母親を訪れ、協力を求めた。母は笑顔で応じた。「とろけるような笑顔」だったことが印象に残っている。

ますみが「なぜ協力を？」と聞くと、義母は「この町は原発のおかげで生活しているんだ」と答えた。

確かに原発の恩恵は少なくなかった。東電のことを、町民は「東電さん」と呼んでいた。

ますみと仁は農業のかたわら、中高生を対象にした学習塾を開いた。子どもたちは、東電の関連企業に就職することを目指して勉強した。

東電の正社員になることは最高の目標だった。

「父親は下請けですが、この子は東電に入りたいから、しっかり勉強を教えてほしい」と子どもを連れてきた親もいた。

第7章 「東電さん」の恩恵

大熊町には「東電さん」の恩恵を得た者がたくさんいる。精肉店を営む菅野正克（かんのまさかつ）（69）もその一人だ。

菅野の店にとって、東京電力はとびきりのお得意さまだった。東電社員が通う食堂は、100グラム1200円のしゃぶしゃぶ用福島牛を5キロ単位で買ってくれた。

福島第一原発では毎年、敷地を開放して「ふくいち感謝デー」が開かれた。

中国の雑技団がやってくるようなハイレベルのイベントだ。県外からも大勢の見物客が詰めかけた。

菅野はその祭りに、空揚げや焼き鳥を売る店を出させてもらった。場所代は無料。店には行列ができ、ずいぶんもうけた。

店には東電社員が年に1回はあいさつにやってきて、粗品を置いていった。タオルのときもあれば、置き時計のこともあった。そのたびに社員は「東電に何かご要望はありませんか」といった。

菅野の妻の寿美子（すみこ）（60）はママさんコーラスのグループに入っていたが、他地区の大会に出かけると「大熊町はいいね。東電におねだりすれば何とかしてくれるから」といやみをいわれた。

10年ほど前、菅野は第一原発の「町民広報委員」を2年間務めたことがある。原発の宣伝を求められたわけではない。月1回程度、原発を学ぶ町民の勉強会に出席するだけでよかった。

会は朝9時から午後2時まで。それが終わると、その場で日当5千円が配られた。昼には弁当が出たが、コンビニ弁当のようなものではなく、折に入った仕出し弁当風の豪華なものだった。

あるとき、講師が「原発は健全」というのを聞いてひっかかった。なぜ「安全」といわず、「健全」という変な言葉を使うのだろう。安全ではないのだろうか——。しかし疑念はそれきり忘れた。

そこに大震災がやってきた。

町の防災無線がしきりに何かいっているが、聞き取れない。備え付けの受信機を使おうとしたら、電池が入っていないかった。こんな非常事態になるとは思ってもいなかった。

町内の双葉病院に98歳の父、健蔵（けんぞう）が入院していた。軽ワゴンで駆けつけた。看護師が「病院内の安全なところに避難させました。大丈夫です」という。安心して、父に会わずに引き返した。

父との再会が1カ月近く後になるとは思いもしなかった。

第8章 99歳、移送の末に

菅野正克の父、健蔵は肺炎をこじらせて半年前から大熊町内の双葉病院に入院していた。98歳という高齢だったが、「100歳まではがんばる」と口にしていた。

原発事故の発生時、双葉病院には338人の患者がいた。2011年3月12日、自力で歩ける209人がバスで避難した。混乱する中、行政側の連携不足もあり、歩けない患者は病院職員らと残された。停電で暖房も入らなかった。

救出が遅れた双葉病院の患者は、16日までに19人が亡くなった。三春町の高校に避難した菅野は、病院で患者が死亡したことを報道で知ってあせる。懸命に父の所在を捜した。

健蔵は14日まで施設に残され、南相馬市の保健所、いわき市の高校、福島市の病院と転々と移送されていた。

1カ月たった4月中旬、大熊から100キロ以上も離れた会津若松市の病院から連絡があった。

駆けつけると、父は大部屋のベッドで点滴をし、鼻にはチューブが入っていた。意識はあるようで、菅野がメモに「ここはあいずわかまつだよ」と書くと軽くうなずいた。しかし衰弱がひどく、3カ月後の6月、99歳で亡くなった。

菅野は子どもの頃から父が嫌いだった。家畜商の父は、登校前の菅野によく牛馬の世話をさせた。すぐに菅野を殴るし、怒ってちゃぶ台をひっくり返すのはしょっちゅうだった。父を憎むようになり、家を飛び出して自衛隊に入った。

30歳を過ぎて、そんな父と和解した。自衛隊をやめて遠洋マグロ漁船に10年乗り、大熊町で精肉店を開いたころだ。放浪生活を卒業し、大熊に根を下ろそうとする菅野を父は受け入れ、菅野も応じた。

99歳なら大往生かもしれない。だがひとり避難生活で苦しんだことが哀れだ。自民党政調会長の高市早苗（たかいちさなえ）が「原発事故で死亡者が出ている状況ではない」と発言したことに、ふざけるな、と思う。

安全神話にどっぷりつかっていたことが悔やまれてならない。

「結局は、町がまるまる東電の下請けのようなものだったんだね」

かつての町長選で、菅野は東京電力出身の候補者の事務所に入り、選挙を手伝っていた。07年に引退した前町長、志賀秀朗（しがしゅうろう）（81）だ。1987年から5期20年、町長を務めた。

震災時、志賀は自宅が津波に襲われた。あと数十秒避難が遅ければ死ぬところだった。

第9章 想定内のはずだ

東電社員から大熊町長になり、2007年まで5期務めた志賀秀朗（81）の自宅は、原発から南西約1キロ、海のすぐ近くにある。

地震が起きたとき、志賀は妻の恒子（つねこ）（80）らと自宅にいた。ほかの家族が自宅に戻った後、高校生の孫が津波に気づいた。みんなで外に出ると、真っ黒い津波が迫っていた。

志賀は町長を辞めた頃から目が悪くなり、ほとんど視力がない。雑木林がなぎ倒される「バリバリ」という音だけを聞いた。雷のような音だった。恐怖を感じた。

長男の妻が運転する車に家族5人で乗り、高台に逃げた。あと少し遅ければ死んでいた。

翌日、町から避難指示の連絡があった。大熊から25キロ離れた葛尾村の弟の家に身を寄せた。避難してから、1号機の爆発を知った。

だが志賀は、原発の爆発は津波にくらべて怖くはなかった。

01年に9・11同時テロが起きたとき、東電の幹部と交わした会話を思い出していた。役場を訪れた東電幹部に尋ねた。

「原発に飛行機が突っ込んだらどうなるのか」

幹部は「側面からの衝撃には強い」と答えた。ならば天井からはどうだ。志賀が尋ねると、幹部は「ちょっと弱い」。

それを志賀は肯定的に解釈した。側面も天井も頑丈にしたら、内部で圧力が高まったときに力の逃げ道がなくなる。天井を壊れるくらいに弱くし、力を逃がす設計なのだろう。テロも今回のような事故も全部織り込み済みののだ――。

原発が爆発しても、東電にとってそれは想定内のはずだ。その証拠に、建屋は側面よりも天井が激しく壊れたではないか。

しかし、事態は深刻になる一方だった。悪化を続ける原発に、東電は対応できなかった。

いつ自宅に戻れるか見通せないまま、町民は散り散りになった。

志賀自身、葛尾村の弟の家から福島市や横浜市の親戚宅を転々とし、今はいわき市に一軒家を借りて避難生活を送っている。

着の身着のまま逃げたため、持ち物は少ない。その中で、一時帰宅時に「これだけは」と持ち出したものがある。「旭日小綬章」だ。08年、地方自治への功労で授与された。

志賀には「大熊町を発展させた」という強い自負心がある。それを形にしたものが、この勲章だった。

前大熊町長の志賀秀朗（81）は1931年、旧熊町（くままち）村の農家の長男として生まれた。のちに福島第一原発が建つ場所は軍の飛行場だった。練習用の赤い飛行機が飛ぶのを眺めて育った。一帯は貧しかった。農家では食えず、男たちは農閑期には東京に出稼ぎに行った。

54年、合併で大熊町が誕生する。父は農業のかたわら、町の収入役を務めていた。職員給与や業者への支払いで現金が足りなくなると、「話をつけてあるから」と町外の商人へ借りに行くよう志賀に命じた。

志賀は20歳代だった。農業の合間に125ccのバイクにまたがって受け取りに行った。ある時は15万円、ある時は10万円。町職員の月給が1万円ぐらいのころだった。

原発を造るため、64年に東京電力が福島調査所をつくった。志賀はその臨時職員になった。2年前に町長になった父に、「これからは給料がもらえる職に就け」と勧められた。

まもなく正社員になる試験があった。簡単な筆記と面接。面接では志賀に6人の子どもがいることが話題になった。志賀が「自然に逆らわないので」と答えると、面接官は大笑いした。東電の正社員になった。

71年、第一原発の営業運転が始まる。農家は次々に原発関連の仕事に就き、出稼ぎをする人はいなくなった。県内でも貧しいとみられていた大熊は活気づいた。

87年、東電を退社して町長選に出馬し、当選した。父が町長だったこともあり、周りから推された。「べつに東電から町長になれといわれたわけではない」と振り返る。

町長になると、交付金や東電の税金など「原発マネー」の恩恵が、平等に行き渡るよう気を配った。

小学校に入学する児童には支度金として5万円を支給。

医療費は中学3年まで無料。

文化センターを建て、コンサートのチケット代は半額を補助。

下水道料金はよそのほぼ半分。

「避難先で町民は『請求書が間違ってるんじゃないか』って思うらしい」と志賀は笑う。それだけ大熊の公共料金が安く、暮らしやすかったということだ。

先の展望は見えないが、志賀には東電を責める気持ちはない。

「復興の資金を考えたら一企業を責めてどうなるものでもない。俺が総理大臣なら国民に『未曾有の災害なので、みなさんに税金をお願いします』というのにな」

第11章 原発なしで困るのは

1987年に大熊町長になるまで、志賀秀朗（81）は20年あまり東京電力の社員として福島第一原発で働いた。土木が中心だったが、原発沖の潮の流れや波の高さを測る仕事もした。

地元の東電社員とは家族同様の付き合いだった。

志賀の家には3ヘクタールの田んぼがあったが、東電に勤めるようになって手が回らなくなった。手が回らないとき、若い社員が仕事を抜けて田仕事を手伝ってくれた。

「東電の課長も次長も何もいわずに若いもんをよこしてくれたよ」

休日には、社員たちがため池で釣ったワカサギや、川で釣ったフナを志賀の家に持ち込んだ。妻の恒子が小さい魚は空揚げに、大きいのはさばいて塩焼きにした。

独身寮の若い社員は、ふだんは野菜をあまり食べていない。恒子は「野菜料理をこしらえると喜んだなあ」と懐かしむ。

原発が恐ろしいという考えはなかった。

広島と長崎に原爆が落とされた直後、100年間は草木も生えないといわれていた。だが現に草木は育ち、人が住み、大都会になっているではないか。

それに、人を殺す原爆と、平和利用の原発はおのずから違う。働く場所ができて農家は出稼ぎにいかなくてもよくなった。

4期目の02年8月29日、福島第一原発などで、東電が自主点検記録を改ざんしていたことが発覚した。シュラウド（炉心隔壁）のひび割れを隠蔽（いんぺい）するという大事故につながりかねない不祥事だった。

10月14日、当時の社長は責任をとって辞任した。原発は運転停止に追い込まれた。

大熊町を含む地元8町村は早期の再稼働を認めた。志賀はその理由をこう説明する。

「どういうトラブル隠しかよく分からんし、私は東電に対して常に安心安全な原発の運転をいつてきた。東電も反省していたから」

いま、志賀はこう思っている。

今回の事故が、原発の恐ろしさを国内外に示したのは事実だ。しかし防災を強固にするという意味では一石を投じ、その証拠に国は事故を起こさないように一生懸命やっている。今はまだ代替エネルギーの見通しも立っていないではないか。原発は必要だ、と。

志賀はいう。「原発がなくなって困るのは国民なんだ」

第12章 奪われた自然観察会

前大熊町長の志賀秀朗（81）は、絶対に大熊町に帰る決意でいる。

理由は二つ。一つは墓や田んぼがあること。そしてもう一つ、町長だった自分があきらめたら町民はどう思うか。帰れないと思う町民が増えるのではないか、ということだ。

「国と東電に除染の最高技術を開発していただき、帰れる日が来ると信じています」

とはいえ原発のおびざ元だけに大熊の汚染度は低くはない。現実を見て、帰還をあきらめる町民も多い。原発から5キロの家に住んでいた高橋清（たかはしきよし）（52）はその一人だ。

高橋は、大熊町では珍しく東電とはあまり縁のない生活を送ってきた。親子3代、100年間にわたって林業に携わる。祖父と父は炭焼きやシイタケ栽培を手がけた。

高橋は高校を卒業して自衛隊に6年間いた後、大熊に戻る。地元の森林組合に勤めた。父とよく山に入っていたので、樹木とつきあうのは楽しかった。

大熊の山間部には幹回りが6メートル、樹齢700年のスギの木もある。そんな木々の前では厳肅な気持ちになった。この森を子どもたちに残したい。そう思っていた。

森林組合時代、年収は320万円だった。妻が園芸会社で働いていたし、高橋自身もスズメバチの駆除などの手間仕事をした。同居する両親の田畑もあったので、家族6人、なんとか暮らしていた。

原発関連の収入のよさがうらやましくもあったが、森を守る仕事は好きだし、そのやりがいには代えられなかった。

森林組合の先輩が「大熊ふるさと塾」という組織をつくっていた。大熊の自然や民話を子どもたちに伝えていこうという試みで、町役場の職員や農家ら約40人が活動を支えている。高橋は15年ほど前、それに加わった。

子どもたちのために、モリアオガエルやホタルの観察会を開いた。

ささやかな観察会だった。ホタルがいる田んぼのあぜ道や、モリアオガエルがいる木の枝を子どもたちに教えた。それだけのことだったが、子どもたちは大喜びだった。「秘密の場所」といって親に自慢する子どももいた。

海水浴場では、海開きイベントに塩づくりをした。海水を釜でたき、最後に結晶ができると子どもたちは目を輝かせた。

原発事故で、そんな楽しみはすべて終わった。

第13章 もう戻れない

原発事故後、高橋清（52）は家族で山梨県に逃げた。次々と爆発が起きる中、より遠くへ逃げなければ、と思った。

山梨では、笛吹市の電子機器工場で庭の手入れなどの仕事をした。電子機器会社の社長が、大熊町から避難してきた高橋のことをテレビ番組で知り、雇ってくれた。

人々は親切で、このまま定住しようかとも考えた。しかし福島ニュースが少なくなるにつれ、大熊のことが気になり始めた。大熊の森のことが頭から離れなくなった。

避難から1年たった2012年3月、山梨から福島に戻り、いわき市の仮設住宅に入った。

大熊に一時帰宅すると、自宅の周辺は荒れ果てていた。

田んぼも梨畑も草木が生い茂り、雑木林のようだった。

自宅は地震後の混乱に加え、窓ガラスが何者かに割られていた。空き巣に入られたようだった。

すぐ近くのため池の土手は崩落していた。

庭の野イチゴはやぶになっていた。子どもたちに「これ食べられるよ」と教えていたイチゴだ。

自宅は原発から5キロ。放射線量はまだまだ高く、住めるようなレベルではない。

大熊に戻る希望が持てるのだろうか。確かめたくなった高橋は、除染作業を体験することにした。

12年7月、知り合いのついでで楢葉町の除染作業に加わった。大熊から南に10キロ余りの場所だ。

ヤッケにゴム手袋で作業した。除草して、その場所の土を混ぜ返す。セシウムを吸着するゼオライトなどをまく。

朝8時から夕方5時まで働いた。

仮設の別棟に入っている両親と次女（17）と一緒に住むため、除染作業に就いたころいわき市に中古住宅を買った。無理だろうな、とは思いつつながら大熊に戻れないことが納得できないでいた。しかし……。

除染作業を続けるうち、戻れないと自分を納得させた。なにより除染の効果が低かった。放射線量は2、3割減る程度だった。

それでも楢葉は大熊に比べれば汚染の度合いが低い。楢葉の人たちは「除染をしたら戻って住むんだ」という意気込みが感じられた。

大熊町内の線量は、今でも毎時10～20マイクロシーベルトが当たり前で、40マイクロシーベルトを超すところさえある。除染で住めるようになるめどは立っていない。

第14章 汚れちまった悲しみ

原発事故が起きた年の夏、高橋清（52）の脳裏にふと中原中也の詩が浮かんた。

「汚れつちまつた悲しみに なすところもなく日は暮れる」

次女（17）が小学校のころ、学校の行事で朗読した詩だ。自分も若い頃に読んだことがある。

以来、その詩が頭から離れない。

除染の仕事を体験してみたが、頑張っても大きな効果はない。元の大熊町に戻るのはいまだ無理だろう。中原中也は純粋な心が汚れてしまった悲しさを書いたのだろうが、それが放射能に汚れた大熊に、自分が愛してきた大熊の大地に重なった。

畳1枚分の白いベニヤ板にフェルトペンで書き写して何度も読んだ。

「ふるさとの大熊には戻れない。自分が汚したわけじゃないのに。そう思うと、やりきれないです」

高橋がベニヤ板に書き写している人はもう1人いる。佐藤祐禎（さとうゆうてい）だ。大熊町で農業をしながら歌を詠んでいた。「ゆうていさん」と慕われていたが、2013年3月に避難先のいわき市で亡くなった。83歳だった。

高橋は原発事故の前、佐藤の自宅を訪れたことがある。林業の傍ら活動していた「ふるさと塾」で頼みごとがあり、立ち寄った。

佐藤はそのとき、自宅近くにあるため池の話をした。江戸時代に土地の高低差を利用して造られた池で、広い範囲の田んぼを潤している、といった内容だ。知識が豊富でおおらかな人、という印象だった。

佐藤が歌集を出していたことを知ったのは原発事故のあとだった。2004年に出版された「青白き光」（短歌新聞社）。タイトルになっている歌はこうだ。

「いつ爆（は）ぜむ青白き光を深く秘め原子炉六基の白亜列（つら）なる」

「青白き光」は、原子炉が臨界に達した時に出る光の色だ。事故のずっと前に、福島第一原発に警鐘を鳴らしていたのだ。

穏やかな農家の老人と思っていたら、佐藤は原発への鋭いまなざしを秘めていた。こんなすごい人だったのか。高橋は懸命に佐藤の歌を読んだ。

「原発があるから何でも出来るといふ一つ言葉は町を支配す」

「原発持つ町の衰れを君知らず『電気どうする』とたはやすく言ふ」

「この子らはいつまで生き得む原発の空は不夜城のごとく輝く」

事故から1年余りたったころ、高橋は佐藤を訪ねた。

高橋清（52）がいわき市に避難中の佐藤祐禎を訪ねたのは2012年、まだ佐藤が元気だったころだ。

大熊町で林業に従事していた高橋と、同じ町内で農業をしながら歌集「青白き光」を出した佐藤。

高橋は佐藤に「『青白き光』、読みました」とあいさつした。

佐藤は原発への怒りを表情に出すこともなかった。事故前に出版した歌集が全国的に知られるようになったことを、驚いたように「どうも有名になりすぎちまって……」。そしてぼつり、「あとは、若い人だなあ」とつぶやいた。相変わらずの好々爺（こうこうや）だった。

しかし、実は佐藤には激しい面もある。それを知る一人が現在の福島県歌人会会長、伊藤正幸（いとうまさゆき）（66）だ。佐藤は05年度から4年間、歌人会の会長を務め、伊藤はそれを事務局長として支えた。

80歳を超えて会長職に就くことを禁止するなど、佐藤は次々と会の改革を進めた。歌づくりにも精力的だった。1カ月に200首は詠んだ。斎藤茂吉の歌を数百首記憶し、寝る前にそらんじていた。

原発を声高に批判することはなかった。ただある時、伊藤にこんなことをいった。

「大熊町で『東電』という言葉が会話に出て来る人は、原発の賛成派だ。『原発』という言葉を使う人は反対派だ」

伊藤は「東電に何かを期待する町民と、原発の安全性を気にする町民との違いを話しているんだ」と理解した。短歌同様、鋭いなと思った。

塾教師、木幡ますみ（57）の夫でやはり塾教師の仁（62）は、04年のある日、佐藤から「青白き光」を渡された。

佐藤は、仁の塾に通う孫を車で送り迎えしていた。ますみの授業を孫が受けている間、佐藤と仁は塾につながる坂道に腰かけて世間話をしていた。そのとき佐藤が差し出したのが歌集「青白き光」だった。

「今度出した歌集だ。実はおれも原発には反対している」

仁は「賛成派だらけの大熊町で、反対派の自分には話しやすかったのかもしれない」という。佐藤は、仁が東北大時代に女川原発の反対運動をしていたことを知っていた。

佐藤は避難生活中に倒れ、12年3月に83歳で亡くなった。事故後、佐藤はこんな歌も詠んでいる。

「ゴモラでもソドムでもなき大熊に殺戮（さつりく）の光線そそぎて止まず」

第16章 怒るより現実的要求

大熊町の塾教師、木幡ますみ（57）には、東京電力に対して許せないことがある。

10年ほど前のことだ。第一原発の町民モニターに選ばれ、原発の中に入った。地元住民として、原発が安全に運転されているかどうかチェックするという趣旨だった。

さて、東電幹部に何を重点的に聞けばいいか。

知り合いの原発作業員にアドバイスを求めた。作業員は「非常用電源を地下ではなく、もっと高い所に置くようにいってよ。津波が来たら危ないって」といった。

会合で、東電幹部にその通りをぶつけた。彼らは「いや、大丈夫なようにしてあります」と答え、まともに取り合ってくれなかった。

いっしょに原発内に入ったモニター仲間の友人と事故後、郡山市内のラーメン屋でばったり会った。彼女は顔を見るなりいった。

「あの時ますみさんが電源は高くに上げろっていったのにね！」

そうだ、とますみは思った。東電は住民の意見を聞く気なんかなかったんだ。格好付け、ガス抜きで呼んだけなんだ。バカにしてる。

その怒りは、避難生活でのエネルギーを生み出した。放射能や原発のしくみを勉強し、A4サイズの手書き新聞をつくった。町民の思いや、町内各地区の線量を書いた。500部コピーし、田村市や会津にいる大熊町の避難者に仲間3人で配った。

新聞には携帯番号を載せた。女性からどんどん電話がかかってくるのかも」と思った。

原発事故の３カ月後、「大熊町の明日を考える女性の会」を柿沼（かきぬま）やよい（６５）ら９人で結成した。会員は増え、一時は３０人にまでなった。

大きなテーマとなったのは、除染で出た汚染土などを置く中間貯蔵施設を大熊で受け入れるかどうか。

「非常用電源」の怒りが収まらない頃だった。「こんなひどい目に遭った大熊が、この上なぜ汚染物質を受け入れなければならないのか」とますみは思った。

しかし、次第に考えが変わった。

一時帰宅のたび、放射線量が下がっていない現実にがっかりする。ここにはもう戻れそうにない。それなら中間貯蔵施設を受け入れた方がいいのではないか。その代わり、きちんと移住先を確保してもらう。

その方が現実的だ。

ますみは、東電への怒りをひとまず置くことにした。

第17章 「賛成」は面会場で

除染作業で出た汚染物質を、大熊町に置いてもいいかどうか。「大熊町の明日を考える女性の会」では、木幡ますみ（57）の他にも中間貯蔵施設を受け入れた方がいいと考えるメンバーがいた。

柿沼やよい（65）はその一人だ。

柿沼は宝塚歌劇団で娘役だった。芸名は「霧里やよい」。先輩が鳳蘭（おおとりらん）で、「私、どうだった？」と演技の評価を聞かれたりした。

出身は東京・渋谷。引退後は結婚して横浜市で暮らす。2003年、「晩年は自然の豊かなところで」と大熊へ引っ越してきた。

家は原発の西北約2キロにある。津波を考えて高台に建てたが、放射能は避けられなかった。一帯は町内で最も線量が高く、自宅の敷地で毎時100マイクロ、室内でも30マイクロシーベルトを超えたことがある。

戻れる日が来るとは思えない。ならば、中間貯蔵施設を町内に受け入れた方がいい。戻ることに期待しても、時間が過ぎていくばかりで、新しい生活に踏み出せない。

11年8月、「女性の会」の要望を国に伝えようという話が持ち上がる。「これ以上私たちに負担をかけないで。電気を使った関東の人たちも痛みを分け合って」と訴えることにした。

会では初め、中間貯蔵の受け入れに反対する意見が多かった。ところが、受け入れ反対のメンバーも一時帰宅を重ねるにつれて「こんなじゃ大熊には戻れないね」というようになった。10月に環境相の細野豪志（ほそのごうし）と面会できることになった直前には、受け入れ賛成で統一された。

問題は町役場への義理だった。面会を実現してくれたのは町役場。町民全体としては反対の方が多い感じだったので、受け入れ賛成を役場に打ち明けるのは気が引けた。賛成といえば、細野に会わせてもらえないのではないかとも思った。

考えた末、ますみは決断する。役場には中間貯蔵施設のことは明かさないことにした。細野に会ったその場で、賛成だといってやろう。

「女性の会」のメンバーにもいわなかった。意思是統一できているものの、町民の反発を恐れて動揺するのではないかと考えたからだ。

夫の仁（62）には上京前夜に打ち明けた。仁は「それでいいんじゃないか」といつてくれた。仁は6月、ますみから腎臓をもらって腎移植していた。一心同体の夫婦だった。

10月24日、ますみらは高速バスで東京へ向かった。

2011年10月24日、「女性の会」の11人は東京・霞が関の内閣府を訪れ、環境相兼原発事故担当相の細野豪志に面会した。

木幡ますみ（57）が「緊急要望書」を提出した。放射性物質を含むゴミの中間貯蔵施設は福島県内につくらないでくれ、と書いてある。町役場向けにつくった文書だ。細野がそれに目を通した。

ますみは胸をドキドキさせながら発言した。

「大熊は放射線量が高いまなので、帰りたくても帰れません。中間貯蔵施設を大熊町につくることを検討してほしい。その代わり、町民が新たに定住する場所を、政府の責任で確保してほしい」

中間貯蔵施設受け入れに賛成の柿沼やよい（65）でさえドキッとした。ますみがこの場で持ち出すとは思わなかったのだ。だがすぐに「そうよ、それを言わなきゃ来た意味ないわよね」と思った。

細野は驚いたようにますみを見つめ、「重い話をいただき、感謝します」と答えた。翌日の記者会見で細野はこう語っている。

「本当に恐縮してしまった。これまで電力の安定供給にご努力をいただいた大熊町の皆さんに、中間貯蔵施設についてまでそういうことをいっていただいて……」

ますみにしたら、細野に感謝してもらおう筋合いはない。東電や国への怒りはあるが、一番汚れている場所からゴミを持ち出すよりも、汚れた場所に持ち込んだ方が放射能の拡散は少なくなる。戻れない場所にこだわって時間をむだにするべきでない。そう合理的に考えただけだ。

福島に帰る高速バスの中で、メンバーの携帯が次々と鳴った。大熊の人たちからだった。テレビで女性の会が中間貯蔵施設の受け入れに賛成したことを知ったようだ。ますみは「みんな怒ってるよ。覚悟しようね」とメンバーにいった。

翌日からメンバーに抗議が殺到した。「お前ら、何で賛成したんだ」と電話がかかってくる。「以前は反対だったじゃないか」と家族から怒られたメンバーもいた。

ますみはいった。「状況に合わせて考えが変わったっていい。誰かがやらなきゃ前に進めないんだよ」

12年9月、復興庁が大熊の全世帯にアンケートをした。回答したのは6割強の3424世帯。結果は「戻らない」が46%、「まだ判断がつかない」が42%。「戻りたい」は、わずか11%だった。

第19章 よーく考えてみる

大熊町の西約40キロに、三春町がある。2011年の原発事故直後、独自の判断で町民にヨウ素剤を飲ませ、話題になった町だ。

13年6月7日、町財務課の管理契約グループ長、久保田浩（くぼたひろし）（44）が町長室に入った。町長の鈴木義孝（すずきよし のり）（73）の決裁を仰ぐためだ。

三春町は、東北電力の株を約2800株持つ。6月26日の株主総会の案内が来ていた。株主が提案した議案に「女川（おながわ）原発（宮城県）と東通（ひがしどおり）原発（青森県）の廃止」があった。

久保田は鈴木に「株主としての議決権は行使しない」という案を申し出た。他の町幹部と協議し、「他県の原発について、自分たちが賛否をいうのはやめよう」ということになったためだ。町長の決裁はすんなり出るものと思っていた。

ところが鈴木は、「俺はそうは思わねえよ。もう一回、よーく考えてみる」。

鈴木はこう考えていた。

三春町は、大熊町など原発近隣地区から避難民を受け入れてきた。いまだに自宅に戻れない人がたくさんいる。その意味では当事者だ。

「宮城の女川原発で事故があったとしても、風向き次第では三春町にも放射能が飛んでくる。立派に関係があるではないか」

当事者の可能性があるなら、たとえ他県の原発であっても意見をいうべきだ――。

原発事故の前、鈴木は特に原発に関心を持っていなかった。町は原発から40キロ以上離れているし、原発に絡む交付金の恩恵などもない。事故が起きることも思っていなかった。

だがいったん事故が起されば、恩恵を受けていたかどうかなど関係なく、多大な影響を受ける。

鈴木は牛の肥育農家だった。事故前は30頭ほど飼っていたが、13年2月に牛をやめた。風評被害が大きかったのだ。以前は1頭100万円で売れていた牛が、50万円にしかならなくなった。仲間の肥育農家の4軒が廃業した。

久保田は再び他の幹部たちと協議し、原発廃止議案に「賛成」の票を投じると鈴木に報告した。鈴木は了承した。6月18日だった。

総会では、原発廃止の議案について「廃止賛成」を投票したのは、三春町などわずかだった。福島県ですら議決権を行使しなかった。議案は否決された。

第一原発がある大熊町も東北電力の株を持ち、議決権がある。大熊町はどう投票したのか。

第20章 「反対。町民だから」

福島県三春町は、東北電力の株主総会で宮城と青森の原発を廃止する議案に賛成した。理由は「他県であっても事故が起さればこちらにも影響が及ぶ」だった。

福島第一原発が立つ大熊町も東北電力の株を250株持っている。だが大熊は、議決権自体を行使しなかった。理由は「民間企業の経営にはタッチしない」。

町長の渡辺利綱（わたなべとしつな）（66）は、今すぐに原発をやめるのは無理だと考えている。原発に代わるエネルギーのめどが立たない中、電気料が上がりれば経済が立ちゆかない。電気料金が高くなってもいいという覚悟が国民にあるなら別だが、ないだろう。

渡辺には大熊の原発が日本の高度成長を支えてきたという自負心がある。首都圏に安い電気を供給し、そのおかげで日本が繁栄した、と。

渡辺自身は長い間、1次産業で生きてきた。生活の糧は水田農業と養蚕。町議会議員になり、議長を務めたあと、無投票で町長に。

志賀秀朗（81）の後任だった。東京電力の職員として原発で働めた志賀とは対照的に、「原発で働いたことは1日もない」と強調する。

原発事故後、役場に幾つか批判のメールがきた。内容は、「原発の恩恵を受けてきたのに被害者のようにふるまうなんて」。

「筋違いな話だ」と渡辺はいう。核燃料税の7割は県に入る。原発マネーの恩恵は県全体に及ぶのに、なぜ大熊ばかりが得をしたように思われるのか。「郡山市のビッグパレットふくしまだって、道路だって原発マネーのおかげではないか。県は誘致に積極的だったのだし、もっと原発の恩恵をPRしてほしい」

塾教師の木幡ますみ（57）は2013年5月、東京での集会に参加したときに放射線量が高い宮城県丸森町の住民からこういわれた。

「大熊町の町長には土下座してほしい」

当然の感情だとますみは思った。大熊の原発マネーは県内でも突出していたし、町と共存共栄だった原発が汚染を引き起こしたのだ。

大熊の住民にすれば、少々の恩恵があったところで自分たちが受けた被害には見合わない。なのに町外からは厳しい目を向けられる。だからこそ、ますみは強く思う。

「私たち大熊町民が原発に反対しなくてどうすんのよ」

プロメテウスの罠〔 3 3 〕 原発城下町「大熊に殺戮の光線そそぎて…」

著 者 朝日新聞（渡辺周）

発行所 朝日新聞社

〒104—8011 東京都中央区築地5—3—2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104—8011 東京都中央区築地5—3—2

<http://www.asahi.com>

2013年8月30日 WEB新書版発行

2013年12月31日 EPUB版発行

©2013 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86526-114-1

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2013年8月30日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。 企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。